

THE MYSTERIOUS
CAIRN LEFT
BY A KILLER.
RINTARO AZUSA

梓林太郎

長編推理小説

穂高殺人ケルン

The mysterious cairn left by a Killer.

あずさりんたろう・ほたかきつじんケルン



光文社文庫

KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

長編推理小説

ほ たか さつ じん

穂高殺人ケルン

著 者 あずさ りん た ろう
梓 林 太 郎

2003年12月20日 初版1刷発行

発行者 八 木 沢 一 寿
印 刷 萩 原 印 刷
製 本 明 泉 堂 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Rintarō Azusa 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73601-7 Printed in Japan

〔R〕本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編推理小説

穂高殺人ケルン

あずさ りん た ろう
梓 林 太 郎

光 文 社

穂高殺人ケルン

解
説

郷原ごうはら

宏ひろし

ハヶ岳南部周辺図



奥穂高岳・西穂高岳周辺図



1

長野県豊科警察署、午後四時。パトカーがサイレンを鳴らして出て行った。が、刑事課にいる六人は頭一つ動かさなかった。

山岳遭難救助隊の小室主任が、くわえタバコで刑事課へ入ってくると、道原伝吉刑事の前へ腰掛けた。道原はタバコをやめたからテーブルには灰皿がない。小室は隣のテーブルにあったアルミの灰皿を自分の前へ置いて灰を払った。

「救助隊もひまらしいね」

「刑事課も同じですね」

小室は灰皿の底にタバコを押しつけた。

「刑事課も救助隊もひまに越したことはない」

「道原さんは、ステーキ好きですか？」

「ああ。たまには柔らかくて厚いやつを腹一杯食べてみたい」

「上高地の帝国ホテルの支配人から電話がありましたね、来週の日曜の夕方、ステーキをご

馳走したいが、署から何人がきてくれますかっていうんです」

「ほう、珍しい誘いだね。おれも行っているのかね？」

「そう思ったから声を掛けたんです」

「課長に話したら、行くというだろうな。あんまり大勢じゃ、向こうも困るだろう」

「支配人は、七、八人でどうですかといっていました」

「七、八人か。各課の課長だけで七人だ」

豊科署には、総務、会計、生活安全、刑事、警備、地域、交通の各課がある。

「課長は、抜きにしましょうよ」

「あとで知れたら、うちの課長はうるさいよ」

四賀^{しが}刑事課長は外出中である。

「うちの課長も、それを知ったら黙っていないでしょうね」

小室の所属は地域課である。

「課長に断って、各課から一人ということにしましょうか？」

小室があらたにタバコをくわえたところへ、受付の女性警官が入ってきて、道原の席に近づいた。

「道原さんに、面会の方がきています」

面会者が訪れた場合、それを電話で知らせてよこすものだが、彼女は直接伝えにきたのだ。

「名前は？」

「鍋島なべしまといってくださいといいました」

「鍋島……」

「とても瘦やせていて、眉まゆが濃くて、目が鋭く光った男の人です」

「歳としの見当は？」

「六十半ばではないでしょうか」

「鍋島さんだ」

道原は椅子いすを立った。目の前の小室を無視するように、彼は女性警官より先に階段を下りた。

受付の前の長椅子に、鶴のように痩せた男が腰掛けていた。紺色のジャケットに灰色のズボン姿だが、上着の袖そでには皺しわが寄っている。

「鍋島さん」

「おお、伝さん」

鍋島は脇に置いた紙袋を提さげて立ち上がった。

「お久しぶりです」

道原は深く腰を折ったあと、手を握った。「お元気そうで」といいかけだが、とてもそうは見えなかったし、握った手は骨ばっていた。階段の途中で見た瞬間に、「痩せたな」と感

じたのである。

鍋島は近くへきたついでに寄ったのだろうか。

「忙しいんだろ？」

「ひまなんです」

「そうかね。電話もせずに来て……。伝さんがいてよかった」

鍋島は署の一階を深呼吸するように見回した。

道原の手がすいていたら、きいてもらいたい話があつて訪ねたのだといった。

「外へ出たほうがいいでしょうね？」

道原は実年齢より老けた鍋島の顔を窺^{うかが}った。

「出られるかね？」

「支度をしてきます」

腰掛けて待っていてくださいと道原はいつて、刑事課へもどった。

小室はいなかった。

伏見^{ふし}刑事事に、外出する旨を伝えた。

「美濃^{みの}家へ行くつもりだ。なにかあったら……」

「お客さんですか？」

「諏訪^{すわ}署にいたころの先輩なんだ。折り入って話したいことがあるというんだ」

鍋島順一郎は、じゅんいちろうどこかを病んでいるようにも見えた。話というのは自身の健康に係

ていることではないか。

道原と鍋島は五年前までの約五年間、諏訪署刑事課で一緒に仕事をした。鍋島は定年で退職したのだが、退職後の就職先が見つからなくて悩んでいたのを道原は思い出した。当時道原は四十だったが、自分も同じような人生をたどりそうな気がしたものである。

鍋島は岡谷市出身だった。茅野市に家を買って住んでいた。三年ほど前だったか道原は盆に、諏訪市の実家の墓参りに行ったさい、鍋島を自宅に訪ねた。彼は喜んで道原を迎え、縁側ですいかを馳走になった。それ以来会っておらず、年賀状と暑中見舞いを交換するだけになつていた。

刑事時代の鍋島は粘っこい性格で、いったんクロとにらんだ被疑者をとことん追いつめ、夜といわず休日といわず納得するまで調べていた。決して愚痴を口にしない彼を、道原は刑事の鑑かがみのように尊敬していたものである。

道原は長椅子にすわっている痩せた鍋島を見ながら階段を下りた。

「近くに静かな店がありますから」

道原は外を指差した。

「豊科署はきれいになったんだね。見違えた」

「この建物になってから八年ぐらいはたっているそうです」

「以前は木造の貧弱な二階建てだった」

現在は三階建てで、玄関の前には男女の像が建っている。男の像はピッケルを手にして、人に声を掛けていっているように手を挙げていいる。庭も広く、花壇ではピンク色のコスモスが微風に揺れ動いている。

門を出ると鍋島は署を振り返った。その姿は名残りを惜しんでいるようでもあった。

バイクで入ってきた制服警官が、道原に敬礼した。

「伝さんは変わっていないね。元気そうだし、なによりだ」

「お陰さまで、これといって……」

悪いところもないので、といいかけて口をつぐんだ。

「少しお痩せになったようですが？」

「この夏から、寝たり起きたりだ。酒を飲んでもうまくない。タバコは一年前にやめた」

諏訪署時代、鍋島にはたびたびおごってもらった。彼はタバコを日に五十本ぐらい吸い、

日本酒なら五合ぐらい飲んでもけろりとしていたものだ。

美濃家にはまだ客が入っていなかった。

二階の奥の部屋がいいのだがというと、顔なじみの若い女性従業員が盆におしぼりを二本のせて先に立った。二階にも誰もいなかった。

なにを飲むかと鍋島にきくと、びんビールにしてもらいたいという。以前の彼は、まず大

きなジョッキの生ビールを、ほとんど一気にあけ、日本酒に切り替えていた。運ばれてきたビールを、道原が注いだ。

「一週間ぶりかな」

鍋島はグラスのビールを三分の一ほど飲んで呼吸をととのえた。

道原はイける口だが、きようはすすみそうもない。

「今月初めに大阪へ行ってきたね」

鍋島は口をハンカチで拭いた。薄いブルーのハンカチにはアイロンがかかっていた。彼の妻は元気らしい。

「大阪にはお嬢さんがいらつしやいましたね」

「娘に会いに行ってきた。孫が二人いて、上は女で小学生になった。……伝さんの娘さんは？」

「高校三年です」

「もうそんなに……」

道原の一人娘の比呂子ひろこは鍋島に会ったことがあるが、もう顔を覚えていないだろう。

「大阪からの帰りは台風の日でね、静岡駅で新幹線が止まってしまった」

「そんなことがありましたね」

それは九月三日か四日だった。

「何時になったら動き出すか分からないので、駅の売店で本を買って読んでいた。私は小説をめったに読まないが、シンプルな題名と表紙の絵に惹かれて買ったんだよ」

鍋島は紙袋からその本を出して見せた。

タイトルは「岩壁の刃」^{やいは}。著者は尾浜史朗^{おはましろ}だった。この作家のべつの作品を道原は読んだ

ことがある。おもに恋愛小説だが、最後に主人公の男女のどちらかが死ぬという悲劇が仕組まれていることで知られ、映画にもテレビドラマの原作にもなっている。

「岩壁の刃」の装丁は、山の切り立った岩壁が赤で、そこに青いナイフが突き刺さっている派手なものだ。タイトルと作者名は黒である。

目次を開くと四編の推理小説が入った作品集であることが分かった。

鍋島がなぜこの本を持ってわざわざ道原に会いにきたのかというと、表題の「岩壁の刃」という作品は、実際に起こった山岳遭難を下地^{やうがたけ}にしているからだという。

「伝さんも覚えていると思うが、八年前、八ヶ岳^{やがたけ}の硫黄岳^{いおう}で、単独行の男が諏訪側へ落ちて死んだ事件があった」

「よく覚えています。平坦地に落ちた遭難者は掌^{てのひら}に、ローマ字を一字書いていて、それが問題になった事件でしたね」

「結果は、遭難事故として片づけられたんだが……」

遺体には事故とは決めがたい痕跡が認められたことから、諏訪署は捜査を開始した。その

捜査に道原も鍋島も参加した。

2

八年前の九月に起きた硫黄岳での遭難はこんな事故だった。

遭難者は塩屋敏行^{しおやとしゆき}、当時四十二歳。住所は東京都杉並区^{すぎなみ}。彼は単独で硫黄岳に登り、夏沢^{なつざわ}峠^{とうげ}へ向かって下りかけたところで、西側の断崖^{だんがい}を転落した。

塩屋は谷底状の平坦地で遺体となって発見されたのだが、左掌に黒のボールペンで「M」の一字がこすりつけたように太く書いてあった。ボールペンは遺体の脇に落ちていた。彼は垂壁に沿って転落して谷底に倒れたが、しばらく生きていた。死ぬまぎわまでペンを動かしていたらしいということになった。

検視の結果、背中に刃物で切ったような傷があり、出血していた。現場にのぞんだ救助隊からこの段階で刑事課に連絡があった。刑事課は念のため遺体の解剖を要請した。その結果、死亡したのは彼が硫黄岳に登った日の午後であると推定された。死因は転落による全身打撲。背中の裂傷はナタのような刃物を受けたものと断定された。

このことから塩屋は、稜線^{りようせん}において何者かにナタ様の凶器で一撃され、犯人によって断崖を突き落とされた。平坦地に達した彼はしばらく生きていて、持っていたボールペンで掌